

「ありがとう西高！」新聞

発行元：「ありがとう西高！」実行委員会 広報室
Mail : nishikouarigatou@gmail.com

Instagram : nishikouarigatou
twitter : @nishiko_arigato
Hashtag : #ありがとう西高

西高の歴史を振り返る

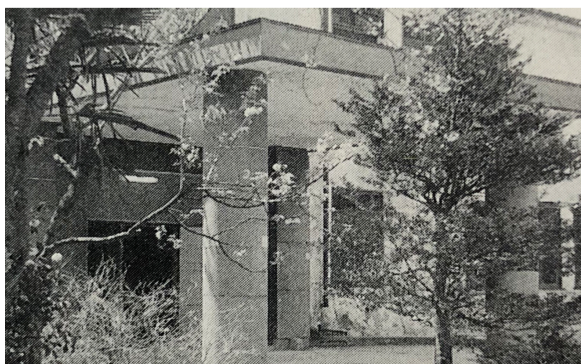
今号からシリーズで、半世紀以上前から続く大宮西高の歴史を紐解いていきたい。今年度で大宮西高校は創立57年を迎える。しかし、57年前から現所在地に西高があるわけではなく、名前も「西高」ではなかった。我々の母校はどのような歴史を歩んだのか。「創立50周年記念誌」をもとに、過去を振り返りたい。

第1回 設立と三度の校地移転

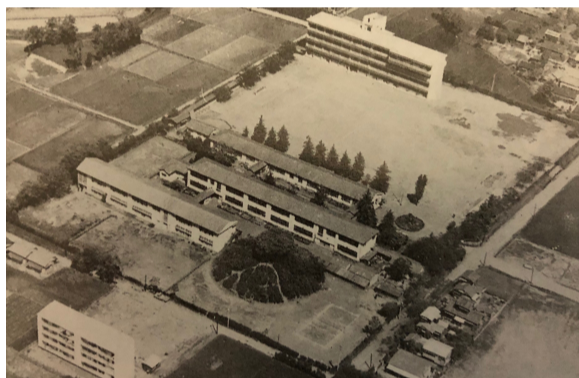
1962年(昭和37)3月、「埼玉県大宮市立高等学校」が設立した。(設立時点では「西高」の名が無いことに留意されたい)

戦後ベビーブーム世代が高校進学を迎えはじめた時代。高校進学率の上昇に伴い、各地で高校新設が急がれていた。西高もその中で生まれた学校である。当初の学校の所在地は、大宮市日進町0番地。大蔵省所属建物を借りての開校だった。実はこの校舎は、かつて自衛隊の駐留米軍宿舎だった建物であった。4月の第一回入学式では、四学級212名の生徒が入学している。そして、4月20日より授業が開始され、この日は後に(1963年)開校記念日として制定された。

翌1963年(昭和38)5月、学校は桜木小学校旧校舎(明治初年建造)に移転する。校舎の老朽化もひどく、当時の西高生は廊下を踏み抜かないよう注意された。この校舎は小学生との共同使用であり、当時の資料によると「小学校に入学？」と友人にからかわれた生徒もいたそうだ。間もなく9月には現在の所在地に近い現在のさいたま市立三橋中学校に移転した。そして11月には現在の学校名の原型になる「埼玉県大宮西高



1962年頃、西高設立時「日進校舎玄関前」



現住所移転時の西高、北側の校舎のみ現存(写真上)

等学校」と改称。1965年第1回卒業証書授与式が行われたと同時に、西高生なら誰もが知っている生徒会誌「ねんりん」第1号が発行されている。

ここまで開校から3年間の歴史を概観したが、1965年時点においてもまだ学校は現在の場所にはなく、約1年間隔で三か所も各地を転々としていた。ついに校舎が、現在の場所(現さいたま市大宮区三橋4丁目96番地)に移転する運びになったのは、1966年(昭和41)4月である。三橋4丁目には古墳群があり、西高は其中で一番の規模を持つ稲荷塚古墳を敷地内に有することになった。なお、移転当初の校舎群は、現在とは随分違った姿だった。かつては、古墳付近に東西に延びる木造校舎三棟があり、校庭を挟んで北側の校舎があった。この「北側の校舎」のみ現存しており、現在の北側校舎の半分(家庭科室、図書室あたり)となっている。この年には、校訓「和敬信愛」が定められている。勉学だけでない人と人とのつながりを大事にすることをモットーに、西高は新たなスタートを切ったのだ。



旧体育館跡地では、新校舎を建設中(3F渡り廊下より)

あの場所は、今 - 旧体育館篇 -

1960年代後半の航空写真を見ると、現在の重層体育館のあたりに3列に並ぶ校舎と、北側に現在の西高の校舎の一部、さらにその間あたりに既に旧体育館が建っているのが見える。1966年に三橋1丁目にあった建設直後の校舎を三橋中学校に譲り、交換する形で当時三橋中学校があったこの土地に西高がやってきたのだが、北校舎の特別教室付近とほぼ同時期に作られた旧体育館は、西高の中でも最初期の施設であることがわかる。

記者の記憶に残る在りし日の旧体育館は、平たいかまぼこ型屋根の典型的な学校の体育館といった風貌で、記者が在校生であった2000年代前半もまだ一部授業や課外活動に使われていた。特に球技大会では例年バドミントンの会場となっており、少し柔らかい床に難儀した記憶がある。空調がなく夏は戸や窓を開け放してあり、昇降口を出ると目の前の旧体育館から運動部の声がよく聞こえてきたのを思い出す。その頃はもう塗装も剥げて基礎のコンクリートも角が取れ、さながら傷も誇らしげな歴戦の勇士といった感があったが、暮れかけた日に照らされた姿はどこか寂しげでもあった。

取り壊し後に駐車場となっていた跡地では、新校舎の建設工事が進んでいる。その役割を継いだ重層体育館とは20年余りの同居期間があった。先輩から後輩へ伝統が伝わるように、この間には何かを受け継がれたのだろうか。次稿では、より若い世代の卒業生の筆も交え重層体育館について書きたい。(石川)

大宮西高 伝

育む次世代の夢、期待と願い

丸山薫さん（ピアニスト）

幼い頃からピアニストを志していた丸山さん。大宮西高を卒業後、本命の音大への進学は叶わなかった。やむなく、別の私立の音大に通い始めものの、すんなりと馴染めたわけではなかったようだ。「ぬるま湯」を感じた焦燥感の一方で、「このままでも良いかな」と居心地の良さもあった大学生活。複雑な心境の中、何が丸山さんをドイツへ向かわせたのか。



西高祭での演奏を終えて新聞部の取材に応じる丸山さん。未来に育つ高校生に、かつての自分を重ねる。

きっかけは 恩師からの一言

「それで良いの?」。私立の音大に通ってしばらくすると、丸山さんは中学時代からのピアノの恩師に、こう問いかけられた。複雑な心境は語るまでもなく「演奏で分かったと思います」と丸山さんは振り返る。たった一言ではあったが、当時の丸山さんにピアニストになる夢を思い出させるには十分だった。丸山さんは私立の音大を中退しドイツへ留学を決意。20歳の頃だったという。

文字通り、単身、トランク一つでドイツへ渡った丸山さん。並々ならぬ苦労もあったことと思うが、「私、苦労を苦労と思わない体質みたいなんですよ」と笑顔を見せる。ドイツには、音楽を志す留学生が世界中からやってくる。その多くは、母国語が通じる者同士で集い、支え合う。それでもホームシックにかかる人は出るそうだ。ところが丸山さ

んは「せっかくドイツにいるんだから」と、ドイツ人の友人とばかり過ごす日々。ホームシックどころか、およそ6年半、帰国しない期間もあった。

卒業アルバムに 奮起

もっとも、帰国には時間もお金も必要になる。勉強に忙しく、経済的な余裕もない。それも含めて丸山さんにとって、充実した時期だった。久しぶりに帰国すると、丸山さんは決まって西高の卒業アルバムを開いた。かつての友人の笑顔に、奮起したようだ。

ヨーロッパ各地を演奏活動で行き来しながら、2002年にデトモルト国立音楽大学を首席で卒業すると、2006年にはライプツィヒ国立音楽演劇大学大学院を卒業。ドイツの国家演奏家資格を取得し、ついに自身が音大の講師として、若手を育成する立場となった。

ドイツに渡って20年ほど経った頃、丸山さ

んは40歳を手前に心境の変化があった。ドイツでの生活や仕事にも慣れ、不自由なく過ごしていたものの、挑戦する機会を見出せなくなっていた。「また、ぬるま湯だなあと感じていたんです」。次第に、母国の日本で活躍したい思いが募る。家族や友人からは思いとどまるよう説得もされたが2016年、活動拠点を日本に移した。

未来への願い

丸山さんは現在、演奏活動の傍ら、地元の浦和区でピアノ講師を務めている。西高が中高一貫校へ移行することに何を思うのだろうか。丸山さんは「規律に厳しい学校だったら今の私はないかもしれない」と前置きしつつ、「大宮西高の持っている、おおらかさは残ってほしいです」と続けてくれた。おおらかさがあればこそ、丸山さんの夢は実った。自身の経験を重ね、同じような風土に次世代の夢が育まれることを願った。